作曲家　細川俊夫　～世界の檜舞台で活躍する日本人（２）～

中東生

2013年07月31日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

現在、現役の日本人作曲家のナンバーワンは誰かと世界で問えば、細川俊夫氏の名が挙がるだろう。8月25日、世界最高峰のザルツブルグ音楽祭が細川氏に委託した作品がザルツブルグのフェルゼンライトシューレ（岩窟乗馬学校）で初演される。シャルル・デュトワ指揮、NHK交響楽団による演奏だ。N響はあとで触れる『星のない夜』という細川作品を日本初演しており、その時の素晴らしい演奏に、細川氏も満足しているという。今回の『嘆き』という新曲は、現代の日本人が共有している悲しみがテーマなのだという。

ザルツブルグ音楽祭は昨年から世界の宗教音楽をテーマに掲げている。昨年のユダヤ教に続き、仏教・神道がテーマの今年、日本に焦点が当たり、日本を代表する作曲家の細川氏に作曲が依頼され、「日本のみならず、アジア最高のオーケストラとして（シュタードラー総裁言）」N響が招待されたのは

当然の流れと言えるだろう。『嘆き』の誕生には、何か神懸かりなものを感じさせられる。

２０１２年３月１１日ドイツの新聞に載った写真が作曲の原動力になったと細川氏はインタビューで語ってくれた。津波で子供を失った母親が、祈りながら我が子の遺体を探して海岸を彷徨っている写真に衝撃を受けたという。誰も消すことができない悲しみを、せめて浄化できるのが音楽の力だという確信から、題材となるものを探しているうち、ザルツブルグ音楽祭を訪れた際に、ザルツブルグ生まれの詩人トラークルの数々の石碑が目につき、彼の詩に曲をつけることにしたという。

細川氏がトラークルの詩に出会ったのは、ドレスデンの聖母教会修復完成記念のため２００９年に作曲を依頼された時のことだった。ベルリン高等研究所のマイヤー＝カルクス氏にこの詩人を推薦された。そうして完成したのが前述のオラトリオ『星のない夜』だ。「四季」をテーマにした詩に、ドレスデンと広島へのオマージュをはさみ、自然へのレクイエムとしたという。空爆によって破壊されたドレスデンと、原爆で破壊された細川氏の故郷の広島、そして今回は津波や原発によって「人間が自然を破壊していく」という悲しい事実に捧げる鎮魂歌シリーズと言える。

――ザルツブルグ音楽祭から仏教思想を世界に発信するということをどうお考えですか。

私の作品の根底には仏教思想が存在していると思います。例えば『松風』(今年ドイツで初演され、全日完売となった細川氏のオペラ)も能に由来していますが、松風と村雨という２人の女性は心の中に執着を持っているため、この世に戻ってくるのです。そしてお坊さんの前で歌い、踊ることで、音楽によって成仏させられるという物語です。

今回の『嘆き』はアンナ・プロハスカという大変実力のあるソプラノがシャーマンとなり、オーケストラは海を表現しています。人と自然が溶け合うことを願うように、海の響きとシャーマンの声が１つとなるのです。自然と人間が断絶してしまった現在において、私達にはもう祈ることしかできないのです。そして成仏しか救いがないのです。

悲しみは、それを美しく演じることによって浄化されると思っています。悲しみを溶かし、カタルシスを喚起することができるのです。私達音楽家は政治的メッセージを伝えようとしても弱い存在です。魂を浄化していくことでしか、世界を変えていくことはできないのではないでしょうか。そのような意味で、宗教をテーマにすることは素晴らしいと思います。

――そのような思想から作曲家を志したのですか。

いえ、初めはピアノを４歳から弾いていました。中学生の頃に小澤征爾のファンになり、レコードを集め始めましたが、その中に武満徹のノヴェンバーステップスを見つけ、彼に憧れるようになりました。ですから今回のザルツブルグ音楽祭でNHK交響楽団披露するプログラムの中に、武満氏のノヴェンバーステップスと自分の作品が並んでいることに感激しています。

当時の作曲界はとても保守的だったので、２０歳の頃ベルリンに渡って約１０年勉強し、やっと作曲家として身を立てられるようになりました。私が最終的に作曲家という道を選んだのは、西洋音楽を愛してはいるけれど、自分の国の音楽ではないという小さな違和感を感じていたからだと思います。自分の言葉で、または言葉を越えたもっと深い音楽を作りたかったのです。

――日本人に伝えたいメッセージは何ですか。

水戸室内管弦楽団が日本初演する『開花　II』でも、泥の中から美しい蓮の花が咲くという仏教思想を表現しています。何かが成就するためには根が必要なのに、日本は約１５０年前に西洋文化を取り入れた時、日本人としての根を失いました。今の日本人は日本の伝統音楽を知りませんが、西洋音楽も実は１５０年しか知らないのです。私がヨーロッパで得た友人達は、先祖がシューマンだったりするのです。他者としての西洋を知ると共に、自分達のルーツを知ることが大事です。日本人が持っているのは浅い根であって、深い根を持っていないと、本当に美しい物は作れないのです。本当の西洋音楽を知らないで、憧れるかけなすかしか出来ないのですから。

僕自身、日本人としてのアイデンティティから日本の伝統音楽や日本の宗教を学んだのは、ベルリンに出てからでした。古いものから新しいものまで、世界中の民族音楽を学び、ガムランやアフリカの音楽などもフェスティバルで触れる機会がありました。その中から１９８５年に笙奏者の宮田まゆみさんに出会ったり、龍笛奏者やお坊さん方とも３０年来のお付き合いをしています。現在もまだ学んでいる最中ではありますが、そのような経験を経て、最近やっと自分の音楽のルーツが見つけられそうな気がしてきています。

日本は今、悲しみが多く、未来がないと感じます。下降しているのは確かですが、よい下降の仕方もあると思うのです。それに私は希望を持っています。日本には素晴らしい物が沢山あります。仏教、庭園、尺八などの古楽器や雅楽、絵、建築、文学、それら１０００年の文化を尊重して、外国文化も自国文化も両方を知り、誇りを持って、世界中の文化を一緒に味わえるような子供達を育てていきたいものです。

２０１３年夏、ザルツブルグ音楽祭で日本の悲しみが細川俊夫の音楽に乗って浄化された後は、日本も平和な未来のために歩む力が得られるのかもしれない。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.